

あぶらむ通信

第3号 1988年10月1日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町宇津江 TEL057772-4219, 3828

飛驒だより

あぶらむの里敷地のななかまどの葉が、ちらほら赤く色づきはじまりました。この夏訪れた人々が去りだすと、飛驒地はもう秋です。今日9月6日は宇津江地区の村祭り、カンカコカンと独特の鐘、タイコが山あいの村に静かに鳴り響いています。

「あぶらむ通信3号」を手になさっている皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。早いもので国府に来て5ヶ月、飛驒地の生活は2年半となりました。

去る5月22日雨の中、家族総出で田植えを行いました。大家の野村晃さんのお世話で1反5畝(450坪)の田を借りることができました。期待される収穫は12俵(1俵60kg)、家族1年分のお米が収穫できるのです。全て手植えと張り切っていたのですが、都会脱出2年目位では未だ足腰がひ弱、1/3位でギブアップ、残りは田植え機の力を借りることとなりました。



雨の日の田植えを終えて

それまでは全く無関心だった田んぼですが、自分たちの米が植わっているとなれば話は別、通行の度に車を停めてその成長ぶりに関心を寄せるから現金なものです。

あれから3ヶ月余、稲も黄色く色づき、重そうに頭を垂れています。9月下旬には刈り入れです。その昔アメリカに移住した人々が、収穫感謝祭を盛大に行った気持ちの一端が理解できるように思います。

これまでものを作るということに特別な関心を払うことはありませんでした。1つのものがどのようにして作られ、そこにどのような喜びや苦労があるのか、私には考えも及びませんでした。都会生活の悲しみでしょうか。

10年前、現在ささやかな支援を続けている孤児院「聖天使園」のあるフィリピンの山岳地帯を訪ねるようになってから、ものを作るということに対しての私の意識は少



サガダ地方のライス・テラス

しづつ変わりはじめました。

彼らの主食は米、平地など一切求めることはできません。急な山を切り拓き、田を1枚々石垣でささえ、全山丸ごとの棚田「ライス・テラス」をつくり、山にへばりつくようにして米をつくっているのです。それは、見るには実に美しい光景です。でも米をつくるにはこれ以上の

辛い条件はありません。自分の田に行くまで、急峻で迷路のような小道を2～3時間、人間1人の力で運搬できる量は知れたものです。刈り入れたささやかな稲を頭にのせ、元きた険しい道をもどるのです。それまで、彼らのさしだすご飯を何気なく食べていた私ですが、その一杯のご飯がどのようにして私たちの食卓にとどいているのかを知った時、食べることに對して私の姿勢は少しづつ変化していきました。少しづつではありますが、「感謝」や「ありがたい」という言葉を、身をもって感じはじめようになりました。

しかし、生活の隅々まで便利さを求める私たちはどうでしょうか。「便利である」ということは、いかにその間の工程を省くかということだろうかと思います。自分が労することを少なくし、結果だけをすばやく手にすることを私たちは「便利」とよんでいるように思います。確かに、木を切り倒し、重い丸太を家まで運び、薪を割り、朝早く起きて炊く一杯のご飯より、タイマーをセットさえすればお好みの時間に炊けている方がどれだけ便利かわかりません。でも、私たちの生活の中にもものごとの過程が省かれて存在しないということは、一体何をもたらしているのでしょうか。少なくとも「ありがたい」という気持ちが薄らいで行くことは避けられないと思います。子供たちに「感謝しなさい」と言っても彼らには実感は伴わず、困惑するのが現代だろうと思います。

「問いと答の間」、これは「教育とは何かを問いつづけて」（岩波新書）に出てくる大田氏の言葉です。人間が他の動物と異なる点に刺激に対する反応の鈍さをあげています。1つの問いかけを受けて、その答を見出すまでの間、私たちの思考は果てしなくかけめぐるので。問いという刺激をうけ、答えという反応を示す間に、思考するという間（時間）があるところに、人間が人間となって行く独自の秘密があると語っています。そこには見えないものが見えてくるのです。そして、問いと答の間が失われることは、やがて人間性の崩壊に連なることを鋭く指摘されています。

私たちの生活、便利さのかけ声のもと、この「問いと答の間」がどんどんと縮まり、失われて行くように思えてなりません。問いかけへの答の速さのみが求められるなら

ば、私たちは人間を過ぎて動物へと退化して行く事でしょう。便利さの中の人間退化論、私は速さを求めるのではなく、1つ々の過程を重ねる“もの創り”を通しての人間形成に、もう1度新たな視点を置きたいと考えています。

さてこの夏、あぶらむの宿には延べ150人の人が訪れて下さいました。十分なもてなしはできませんでしたが、食卓の野菜はほぼ全て自給することができました。どれも味わい豊かなものでしたが、畑で完熟したトマトには昔の夏の味を思い出しました。自分たちで耕し育てたものを食卓に、この当たり前なことが贅沢となった時代です。どこかに大きな矛盾を感じながらこの贅沢を支援して下さいている皆様にお届け致したいと思っています。



あぶらむ総出で刈入れ

現在、あぶらむの会では、野菜、米、きのこと類の外に、ベーコン、ハムの燻煙品をつくっています。特に燻煙品に関してはまだまだ研究の余地はあるのですが、ある程度商品として皆様にお届けすることが出来るようになりました。私たちの1つのねらいは、健康に害を与えるような食品を排除することだけでなく、生産者と消費者がお互いに顔がわかっているような関係をつくりたいのです。お互い相手の顔がわかっているならば、つくる側も消費する側も、もっと責任的であると思います。近い将来、教会単位や職場単位で個数をまとめていただき、産直体制をとりたいと願っています。無論、直接皆様のご家族にもお届けできるように致します。私たちあぶらむの会のハムが、すべてのくん煙品のアブラハムになるよう努力いたしたいと思います。

日1日秋の訪れと深まりを感じる飛驒地です。10月中旬にはもうストーブを炊きますが、今その薪づくりに追われています。あぶらむの宿に囲炉裏もできました。これからの日々、ストーブに薪をくべながら暖をとり、囲炉裏の囲りで訪れる人々とゆっくりと語りあいたいと思います。どうぞ秋そして冬の飛驒地へおいで下さい。お待ちしております。

時節柄、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

'88年9月6日 あぶらむの会代表 大郷 博

フィリピン山岳州サガダ村孤児院「聖天使園」支援の件、ご報告

あぶらむ通信「創刊号」にてお願い致しました上記の件、9月6日現在、27の個人、団体よりご協力を得、612,175円の協力金が寄せられました。ここに感謝をもって中間報告をさせていただきます。今後もご支援下さる方々を募ってまいりたいと思いますので、ご希望の方は、孤児1名につき年間3万円を「フィリピン」と記入のうえ、下記へお送り下さいませ。

郵便振替 名古屋 0-88065 あぶらむの会

伊藤みどり 沢田京子 橋本禮子 中村芳枝 吉川仁 尾針明宏・恵子 鈴木博士
鈴木雅子 伊藤友昭 柏集会土曜学校 桑山玄輝 矢部直美 鈴木宏美 広沢節三
上田聖公会 間島和子 遠藤明子 浅石郁子 渋谷聖ミカエル教会日曜学校
京都復活教会 谷昌三 古沢タイ 聖マッテヤ子供の家 中村ひろ子 牛山るい
中藤初男（以上順不同・敬称略）

フィリピンキャンプのお知らせ

今年の3月実施致しましたフィリピンサガダ周辺でのキャンプを、来年も実施することになりました。日時は2月24日～3月14日、費用は135,000円の予定です。詳細はあぶらむの会まで。

お願いごと

◎ 10月15日、16日両日「食と緑の博覧会」宇津江四十八滝会場にて、バザールを出店することになりました。昨年の経験によりますと『家庭の日用雑貨』が多く売れました。家庭日用雑貨の献品をいただければ助かります。ご協力、よろしくお願い申し上げます。

◎ くん煙品等の食料品の保存のため、「真空パック機械」の購入を計画しています。とっても高価なものなので中古品をと思っています。皆様の中で、真空パック機械の情報をおもちの方は、私どもへご一報下さいますようお願い申し上げます。

広島—長崎国際平和ウルトラマラソン



平和という名のゴールへ向けて

実行委員 下田 英一

前号でお知らせしました、広島—長崎間428kmを走破する平和のためのウルトラマラソンが無事終了したことを報告致します。

「Run For Peace!」(平和のために走れ!)の大郷博実行委員長の合図と共に広島原爆ドーム前を43年前の原爆投下と同じ日に8人のランナーが走り始めました。そして、もう1つの被爆地長崎に同じく原爆投下の日までに着くことをめざして進むのです。428kmを3日で走り抜くことで世界に平和をアピールしようという趣旨に賛同したランナーと彼らを支える伴走クルー約70名がそこに集まりました。

彼らの長い路程はつらく厳しいものでした。多くの大会で優勝し、今回も最初にゴールしたクローズ選手でさえ「今までの大会の中で最もきついものだった」と語っていた程です。暑さ、湿気、交通事情の悪さといった多くの負荷の中、ランナーはひた走りに走っていきます。

「あと40kmは足をとめずに走り続けるぞ」と自分自身に約束したならば、その約束を果たしながら前へ進むという真摯なランナーの姿がありました。また、あるランナーは制限時間内ではゴールができないと途中でわかったにもかかわらず、72時間という制限いっぱい走り抜くことを選んだのです。ウルトラマラソンの走りの中にその人の生き様そのまま反映されていたのではないのでしょうか。

このランナーの飲食糧を供給し、ランニングをサポートしていたのは、多くの伴走者たちです。約2kmおきの飲食糧の供給を428km続けることは、寝るのもままならぬ

程大変なことなのです。とはいえ、その時々々の伴走者の顔はなんと輝いていたことでしょう。走っているランナーには、ひたむきさによる迫力があるのと同様に、伴走者にも、えも言われぬ圧倒的なひたむきさが見られたのです。彼らの姿を見るにつけ、これまで準備してきた時の辛さが一掃され、逆に大きな喜びとなりました。

ランナーも伴走者もどうして広島と長崎を結ぶことにあれ程ひたむきになれたのでしょうか。あるランナーは、「ウルトラマラソンでは、足が痛い、調子が悪いということなしに走り抜くことは無理だ。心の支えになるもの、走るための目標があって初めて可能になる。今回の支えは平和であり、核廃絶だった」と話していました。また、あるランナーは走りながらも、「平和という名のゴールまで必ずや辿り着きたい」と伝えてくれました。長崎まで進み続ける彼らを支えていたのは、1人ひとりの平和への願いだったのです。

広島から長崎と3日の間に結ぶことで平和へのアピールがなされたように、平和はつくっていくものなのでしょう。ランナーは走ることで平和をつくり、また彼らを支える伴走者はサポートすることで平和をつくる過程に身を置いていました。人それぞれの表現の仕方でも平和をつくっていけばいい、その願いが自然と人と人のつながりを得ていくのではないかと感じました。今大会を提案したパトリックさんは、このような同じ願いによる人の広がりをファミリーだと語ってくれました。

最後になりましたが、平和への過程に協力して下さったり、また陰ながら応援して下さい下さったファミリーの多くの方々に感謝申し上げます。

「FOR PEACE」

広島—長崎国際平和ウルトラマラソンの伴走をとおして

神山正之

8月5日、「原水禁」ののぼりが旗めく広島駅に着いた私は4年前を思い出しました。3月に広島と長崎428kmをそれぞれの原爆記念日(72時間)を結んで走り抜く企画を聞かされた時はその遠大さ、大きな意義にただただ驚きました。4年前立教学院創立110周年記念として行われた日本縦断100kmリレーで伴走をした時お世話になった大郷先生からの誘いもあり、参加を承認した私にとって広島駅での暑さと湿気は4年前に伴走はもうやらないと誓った自分を思い出させるに充分で、ただ後悔の念にかられました。

今回の伴走には、その実際と緊急時の対処が書かれた30ページのマニュアルと428kmの道筋の詳細と危険箇所が記された60ページものコマ地図が渡されました。また1

人のランナーに5人1組で1台の伴走車が補給のための氷・食料・水・備品を搭載してつき、3台の本部車がサポートにつくという形をとりました。

私がついたランナーはギリシア人のクローロス選手で、ウルトラマラソンでは世界のトップランナーです。各ランナーそれぞれ、休憩の取り方、食料の



補給はまちまちでしたが、クローロス選手の場合は、途中で20分の仮眠をとった以外は、食事をとる時も歩みを停めず、伴走車は15分に1度の補給にあおられっぱなしとなっていました。その彼でも日本で初めて体験する湿度の高さ、交通量の多さには、まいってしまいました。車内の寒暖計でも気温35℃、湿度65%、国道をとばすトラックのクラクションの中、言葉が完全に通じないだけに、ランナーの苦しみが、伴走の私達にとっては測り知れないものを感じられました。そんな中ニュース等で知ったとあって夜の国道に声援に駆けつけてくれた方々や、ランナーの暑さを心配して自宅で水風呂まで用意して下さった地元の方々のご厚意は伴走にとって大変心強い味方となってくれました。

初めて見る景色に感動する暇もない程の56時間が私にとってはあっという間に感じられました。補給と選手の体調に気を配りながらの緊張の連続をしてきた私にとって旧浦上天主堂のゴールでクローロス選手が杯を掲げて「FOR PEACE」と言って飲み干した時、ただ完走のためだけに夢中になってサポートしていた私にこのマラソンがもたれた本来の意味である「平和のために」という言葉が思い出され胸が一杯になると共に、それを忘れていた自分に気付きました。そして8名のランナーは選ばれた人なのではなく、自ら平和のために走ることを選んだ人たちであることを感じました。この大会が無事に終了できたことは、綿密な計画によるものであるとともに、全ての人々の「平和のために」という思いによっていたものだと思います。

4年前と一緒にですが、次回は伴走ではなく、自ら選んでみたいと思います。

第2回 「マスコミから子育ての現場へ」

川上美砂（主婦）

「今日はどんな人に会えるかな」。昨日の疲れが残っていても期待を胸に出勤する日々。5年前に立大を卒業した私が、いろんな人に会いたいと飛び込んだ現場は、地方テレビ局でした。結婚後、新聞社に移って生活情報などの編集に携わりましたが、幸い新しい生命を授かり、現在は退職して12月の出産を待つ身です。

仕事は災害の犠牲者の遺族へのインタビューをした翌日、中国残留孤児の里帰りに同行したりする目まぐるしいものでしたが、多くの人の味わいある言葉と魅力に出会うことができました。そしてまた、今という時代の状況があぶり出されてくるのを感じずにはいられませんでした。

今年の夏まで担当した「筑紫哲也の気になるなんばあわん」という対談記事の取材でお会いした、映画「男はつらいよ」の寅さん役の渥美清さんは「友達も親族も寅さんのようなものが僕の中にあると笑うんです。自分で一番寅さん化したと思うのは、派手なことが恥ずかしいというのが強くなったことかもしれませんね。金を稼いで今度は何を買おうかと思っていない。面倒ですねえ。」と、しみじみ話してくれました。——長い寅さん人気の秘密を下町情緒だけに求めるのは一面的なような気がする。戦後ひたすら働き、モノを買い求めてきた私たち。その対極に寅さん、それに渥美さんの生き方がある——とインタビュアーの筑紫哲也さんは書いています。自らを怠け者という渥美さんでしたが、取材に同行した私もその慎み深い人柄が新鮮で心に残りました。

また、創業95年という大阪のきつねうどん屋のご主人、宇佐美辰一さんは、1杯のうどんのために各地の農業試験場を回って小麦の栽培方法を話し合い、醤油やみりんも、吟味した素材を使って手造りする昔気質の方でした。「食の文化の荒廃といわぬまでも、行き方がちごうてきたなと思いますね。表向きはええけど、もうひとつ芯のほうのよさを見直さんと……。日本の土地はどうなっているのか、水はどうか、太陽の恵み、空気も含めて」。店の後継ぎの心配はない方でしたが、それまで素材とそれを支える日本の自然が残っているかどうか心配だと言っていました。

こうした人々のメッセージを映像や活字でマスコミがもっとはっきりと問題提起の形で伝えていくべきだと自戒の念を込めて思うのです。特にテレビは視聴率に躍らされているといわれていますが、実際には膨大な広告収入にしっかりと支えられている

ために経営陣は視聴者と向き合う努力を怠り、現場で働くスタッフは日々のニュース取材などに追われ、腰を据えた企画を出すまでにいかないというのが実情だと思います。ですから、私たちが抱えている問題について、どうしたらいいかという答えまでは、勿論マスコミは持っていないのです。

あぶらむの里建設は私たちにとっても夢であり、賭けでもあるわけですが、単なる夢ではなく、その答えを探るための大きなチャレンジであると思います。豊さの中身が空洞化していることに、もうみんな気づいています。癒し切れない疲れを感じている人も少なくありません。飛驒の自然との対話の中で新たな力を授かること、地方と都市が共存する方向を探るなど、少しオーバーな言い方をすれば時代が求めている仕事だと言えるのではないのでしょうか。

ところで、今回の原稿はオメデタを祝って下さるついでに「みごもって」というタイトルで書くようにと依頼されたものでした。が、出産、育児という現実がまだなく半信半疑の私にとって生命の誕生は不思議であると思えません。ただ、母になることについては大きな期待があります。赤ちゃんの成長を見ていける楽しみ、離婚して子供から離れていった母の思いが自らの傷みとして少しでも理解できるのではないかということ。そして、人間の力を超えた神様の力を実感できるのではないかということです。

8月6日、ウルトラマラソンの出発の日は私にとっても忘れられない日となりました。おなかの赤ちゃんがピクピクと動くのをはっきりと感じた日だったからです。ふと沖縄の琉球陶器を作る金城次郎さんの言葉を思い出しました。「焼き物は人と火の合作だから、窯入れの時、この前はいい子供を生ませていただいた。今度もいい子を生ませて下さい、と祈る」というのです。「窯は女性の母体だから出てくる品物は子供なわけさ」とも。日増しに力強くなる胎動を感じながら金城さんのように私も祈らずにはいられません。未知のものは祈りから生まれてくるのかも知れません。もう途中でおろすことの出来ない荷物を背負うことになったぞ、でもその心地よい重量感を喜びとしながら子育てという新しい現場を見つめていきたいと思っています。

「育つこと・育てること」

広瀬勝也（東京都立中野養護学校教諭）

大学時代も教員になった今も、夏休みは充実した過ごし方をしているとつくづく思うのだけれども、今年も充実していました。HNIPU（広島一長崎国際平和ウルトラマラソン）では、たくさんのものを感じました。それと共に『あぶらむの宿』で行われた教育セミナーは、商売柄直接的な問題として、深く考えさせられるものがありました。

というのは終わってからの感想で、初めは高山の自然の中でリフレッシュしようという軽い気持で参加したのです。（決して露天風呂などに期待していたわけではありません。）

さて参加者は、学校や塾の教師などを中心に9名。それに「あぶらむの会」後援会事務局の西田さんと大郷先生を加えた11名。セミナーは全員の話し合いを中心に、飛驒の地を活かした体験を折り込んだプログラムでした。それぞれの参加者の話は勿論のこと、HNIPUの2人のランナー、マックとタヌーさん、それに大郷さんと一緒に働いているたかし君と、いろいろな人の話を聞くことができました。

なかでも大郷家の大家さんでもある野村さんの話は特別に印象に残りました。野村さんは林業と農業を営んでいて、木を育てるという仕事の中で気づき学ばれたことを、野村さんにしか語れない言葉で私達に聞かせてくれました。話に感動したのは、内容もさることながらそのリアリティーの重さでした。聞きかじりの知識ではない、自分の生きた経験から語られる言葉の持つリアリティーでした。これは、たかし君に話を聞いた時も感じました。自分自身に忠実な生き方をしているからこそ、リアルなのかななどと思いながらいろいろな話を伺いました。話を聞くにつれ、木を育てることは人を育てることに通じている、と参加者の多くがそう感じたのではないのでしょうか。教育は育てるのではなく、子供自身が育つのだ、とと思っている人も多いかと思います。僕自身もそう思っていました。野村さんの話を聞いて、またその仕事ぶりを見て、少し考えが変わりました。育つことを援助する立場に立った時、育てるということは深い意味があるようです。野村さんは仕事に手は抜かないし、細心の注意をはらっていました。というのは木を育てる時、この時を逃したら後からは取り返しがつかない時期があるそうです。手を抜いてしまえば、それはそのまま木が育っていく間残るといなのです。何十年も、ことによっては百年を越えるかもしれません。しかも今育て

ている木が木材として使われる頃には、野村さんはもういません。結果を自分が享受するわけではないです。野村さんにとって、木を育てることはそれほど真剣で思いを尽くすことなのです。人間にしても育つに時期があり、その時に必要な環境を整えることも人間の役割であり、それは手抜きは許されないものなのかも知れません。こんな話もありました。ある年、体験学習として子供たちに草刈りをさせているとき、はじめは真面目に仕事をしていた子供たちが、植林した若木をいたずらに刈りだしたそうです。どうしていたずらをしたかという、親たちが切れない鎌を持たせてきたからだということです。本当は仕事をしたいのに、思うように進まないからで、翌年刃をよく研いだ鎌を持ってこさせるようにしたところ、全くいたずらをしなかったそうです。気持ちや意欲はあるのだから、準備さえしっかりと整えておけばちゃんと応えてくれる。野村さんいわく「道具が切れんと心が切れん」。野村さんのそんな話を授業に置き換えてみると、自分の授業は子供たちの気持ちや意欲に答えるものになっているか、考えてしまいました。

夏休みは充実していたなんて思っているだけでは、9月になって新学期が始まると日常生活に埋もれてしまって、セミナーでのことも段々と遠くなってきてしまいます。ある大阪の精神科医がよくこんな言い方をします。人間は気づいただけでは変わらない、見届けることこそ必要だ、と。気づいたのなら、自分の具体的な行動が変わっていくようにそこまで見届けないと人間は変わらない。もしそうなら、これからは少しゆっくりと歩きながら、自分の発する言葉、行動をかみしめないといけませんね。

後援会事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただき誠にありがとうございます。心より感謝いたしております。

私事になりますが、この夏、あぶらむの宿を訪れる機会を持つことが出来ました。そこで、大郷先生はじめ、奥様、子供達、他のスタッフの皆さん方が、様々な困難に直面しながらも、一步一步着実にあぶらむの里建設に向け元気に頑張っている姿に接し、事務局としても、もうひと踏ん張りもふた踏ん張りもしなくてはと、心を新たにさせられました。

明年3月末に支払う残り約650万円の土地取得代金を含めた目標額3,000万円に漸く半分までこぎつけたところです。実現に向け事務局も精一杯頑張りますので、更なるご協力を伏してお願い致します。(事務局 西田邦昭)

9月10日現在の募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額 1,574万5,920円

振り込み総額 1,442万5,235円

※送金先 郵便振替 東京7-255427 あぶらむの会後援会

銀行振込 第一勧業銀行池袋西口支店 190-1434235

あぶらむの会後援会 代表世話人 八代 崇

事務局 〒182 東京都調布市染地3-1-373 西田方

TEL 0424-82-2051

○9月10日現在の募金申し込み者（順不同・敬称略9月10日以降の方は次号にて）

辻光文 阿久津富男 黒井ミヤ 島谷晴朗 池田寿美子 島村幸明 丹羽友子
平貴仁 奥田直樹 小幡尚美 岡野嘉宏 太田泰彦 木ノ内三代治・伸子 森下準吉
楡原伸 大杉匡弘 松島理恵 伊藤友昭 鏑木義之 洞口八郎 赤井充也 石井允
宮坂永史 深井薫 川崎米子 岡田初子 藤元田鶴子 加倉井誠 宮本冬子 中村豊
大居雅治 平良精三 紅林みつ子 村上雅英 西村正和 河田辰治 二木長右衛門
根岸宣子 中村芳枝 遠藤浩 遠藤恵子 首藤治子 立教女学院 鶴川久 小川卓
川田忠四郎 沼尾康彦 竹内昌江 高橋清子 平井元 久山庫平 岩浪恒子
塚田明人 高良孝誠 橋本禮子 瀬川信子 秋山大輔 木島浩 川上廣之 林英夫
金井裕 住田篤 矢澤信夫・栄子 長間四郎 武藤勝弘 湯浅雅弘 百井幸子
浅野純子 船戸英夫 浦地洪一 梶原恵理子 保田孝 篠田克雄 本田リン
二中正秀 平林隆治 藤本絹代 中里奈々子 竹下康雄 岸孝 河村員子 倉辻明男
比嘉良侑・政子 吉田修 岩浅紀久 片岡剛 佐藤良徳・美子 佐口哲 由井正城
甲藤善彦 星野一朗 高田達夫 大平真生 高野勇 R・A・メリット 清水靖夫
秋野京子 滝沢助蔵 小笠原すわ 荒木汐 佐藤緑 宮嶋真 松原邦夫 相原俊次
河合陽子 吉原敬典 平岡真 門田圭介 水野健二 西川征二 新倉俊吾 富田徹・
俊江 久保真理子 鈴木茂男 園部勝・千恵子 押田修実 高瀬由香 諸江和子
高橋亨 木村恵津子 服部峰子 横山正樹 浅野真澄 斉藤喜美子 池田史子
筒井啓子 西村元宏・睦子 小松恵美子 村上長彦 荒木伸怡 坂西公一 新谷加水
斉藤孝 青島和子 諸橋保夫 佐藤裕 内藤武 高坂征男 藤田和久 照沼郁子
荒木譲・京子 島袋栄喜 立花泉 木田献一 祈りの家教会 坂口礼子 村守恵子
川上美砂 矢部直美 中村洋 須藤秀夫 斉藤真 田尾兵二 山下佳子 阿久津忠衛
豊島孝雄 大澤浅香 田島昌子 安土直子 原田光雄 松平信久 倉家正雄
城間真喜 寺西伸平・明子 中村ひろ子 宮田靖匡 鈴木康仁 西村初枝 福峯萬
屋間素子 松田ハル子 野村和雄 丸山和子 塩野博雄 吉村久美 ナカムラキョオ
ヤナギシンイチロウ (株)インターデザイン 相沢牧人 熊谷一綱 尾針明宏・慶子
糟谷珠子 斎藤日丸